

多彩な新人賞 屋良健一郎

「短歌」十一月号で「第六十三回角川短歌賞」の結果が発表された。受賞作は睦月都「十七月の娘たち」。

- ・腕の傷さらして小径歩むとき傷より深く射せる木漏れ日
- ・天文台の昼しづかなるをめぐりをりひとり幽体離脱のやうに
- ・春の夜によそふシチューのごろごろとこどもの顔沈みぬること

・柄杓星そそぐ憂ひの満ちるまに猫をかかへて切る猫の爪
 一首目、明るい木漏れ日が傷口から体内に入り込んでゆくような感覚。二首目、昼の天文台の静けさの中を漂流するような感覚を「幽体離脱」という語が伝える。こういった繊細な感覚をもった歌に惹かれた。

また、二首目は上句の字余りが人の気配のない無機質な空間を感じさせ、それとは対照的なリズムの良い下句への展開（「ひとり」「ゆうたい」「やうに」のイ音「り」「い」「に」の重なりと、「ひとり」「りだつ」の「り」の響き合い）で、幽体離脱の浮遊感が生まれている。三首目、上句で生まれたリズムが下句の句跨がりで崩れ、そのごつごつした感じが、シチューの表面に一部だけ顔を出している野菜の様子を想像させる。初句・二句は「ごろごろ」とを引き出す序詞のように読めるし、四首目の「柄杓星」が「そそぐ」にかかる枕詞のようになっていふことと合わせて、技巧的

な作風と感じた。

ところで、今回の賞では、カン・ハンナ（次席）、知花くらら（佳作）という二人の人気タレントの入選も話題となった。

- ・携帯に斎藤がいて斎藤と齋藤もいる来日六年
- ・「外人は借りられぬ部屋があります」と物件探しに熱くなる耳
- ・好きですと口に出す前、チゲのようにコクが出るまで煮込んでください

カン・ハンナ「膨らんだ風船抱いて」より。作者は韓国出身。一首目、様々なサイトウとの出会いを滞在期間の長さを示す例として出したのが独特で、日本人の漢字へのこだわりに注目した点も外国出身者ならではの。日本に馴染んでいるようでも、「外人」であると自覚させられる瞬間があることを詠んだ二首目、結句の身体感覚が効いている。母国の料理を用いて軽快に詠まれた三首目は楽しい。日韓の深刻なテーマから、軽い内容の歌まで、今後どのような作品が詠まれるのか楽しみだ。

- ・半壊の校舎の裏に集まつて母ちゃん会議戦後が始まる
- ・シャツの下膨らんだ乳房が揺れてゐる んどうこどここ太鼓の音に

知花くらら「ナイルパーチの鱗」は難民キャンプを訪れた際の体験を詠んだ連作のようだ。全体的に口語主体で軽く詠まれてはいるが、「半壊の校舎」「戦後が始まる」といった言葉がはらむ時間の重さに立ち止まる。二首目は独特なオノマトペが異国情緒を生む。これら有名人の活躍が、短歌に興味を持つ人の増加につながれると思う。他にも入選作それぞれにテーマ、魅力があり、多彩さが楽しく読み応えある角川短歌賞であったように思った。